

# アルガロッチェのイピゲネイア再論

## フリードリッヒ大王をめぐる

近 藤 裕 子

### 目 次

1. はじめに
2. ヴィルヘルミーネ（パイロイト辺境伯夫人）
3. アルガロッチェとヴィルヘルミーネ
4. おわりに

### 1. はじめに

前回、『アルガロッチェのイピゲネイアをめぐる一考察』でフランチェスコ・アルガロッチェ（Francesco Algarotti, 1712-64）の『オペラ論』（*Saggio sopra l'opera in musica*, 1755 / 1762）に付録として載せられたアウリスのイピゲネイアの台本について、その後のオペラ作品に対する影響という観点も含めて、単に付録として看過できない作品、さまざまな興味を呼び起こす作品であることを考察した。この台本にはスコアがなく、実際に上演されたかどうかをめぐる意見が異なっている。また、アルガロッチェが伺候した、プロイセンのフリードリッヒ大王（Friedrich der Große, 1712-86）のお抱えの作曲家、グラウン（Karl Heinrich Graun, 1701-59）が上演した *Ifigenia in Aulide*（1748 / 49）に関して、台本製作（台本作者として名前があがっているのは、Leopoldo de Villati, 1701-52）の段階で大王とともにアルガロッチェの関与の可能性が否定できないことも併せて指摘した。<sup>1)</sup>

---

1) 当時はスコアが必ずしも出版されなかったため、失われてしまったものも多い。特にイタリアにおいては 17 世紀半ばから、18 世紀末までオペラの楽譜出版は途絶えている。(Cf. 水谷, p. 34)

グラウンのオペラ版とアルガロッチェの台本が同一か否かの問題については、決定的な判断材料がないため現時点では保留する。

自らもフルート奏者であった啓蒙専制君主のフリードリッヒ大王は、オペラ愛好家であり、ベルリンにオペラハウスを建てさせた。彼は、パイロイト辺境伯に嫁いだ姉、ヴィルヘルミーネ (Wilhelmine, 1709-58) にイピゲネイアのオペラの台本を見せている。大王にとってこの姉は、幼少の頃より大好きなそしてとても大切な身内であり、イピゲネイアのオペラと重ね合わせるとき、この事実は一層、明確になると考えられる。イピゲネイアのモチーフにこめられたフリードリッヒ大王の想いを中心に考察することとしたい。

## 2 . ヴィルヘルミーネ (パイロイト辺境伯夫人)

フリードリッヒ大王の父王 (Friedrich Wilhelm I, 1688-1740) は、息子に対して大変厳しい父親であった。息子がフランス趣向にふけるのを軟弱と考え、父王のもとから自由になるため出奔を計画したとき、見せしめとして、彼の友人 (Hans Hermann von Katte, 1704-30) を処刑し、息子フリードリッヒには監禁を命じた。父に対する反骨精神の表れからか、(確かに当時フランス語は外交の言葉として広くヨーロッパで重視されていたが) 息子 (フリードリッヒ大王) は生涯を通じて、公式にはフランス語のみを使用することになる。<sup>2)</sup>

このように父親から疎んじられ、厳しく扱われたフリードリッヒ大王にとって、共に育った姉ヴィルヘルミーネの存在は大きかった。彼女は父王に反抗して監禁された弟の味方であり続けた。フリードリッヒが監禁されていた 1730 年から彼女が亡くなる 58 年までに取り交わされた書簡 (大王の著作集 Preuss 編 には計 347 通が収められている) には、その後プロイセンとパイロイトに離れ離れになっても、一層深まった姉弟の情愛の想いがこめられている。

次の手紙はイピゲネイアの台本をパイロイトに届けてもらうことを述べた 1749 年の大王から姉宛てのものである。

Il [ mon frère ] vous apportera de ma part l'*Iphigénie*, car il n'y a pas moyen de le charger de mon cœur; vous savez, ma très-chère sœur, que vous le possédez depuis longtemps. Nous faisons une banque-route en n'ayant pas l'avantage de vous voir. Cet impromptu aurait été très-agréable pour nous tous ensemble; mais un destin jaloux de la félicité des hommes semble se complaire à traverser tout ce qui leur peut être agréable. ( 19 janvier 1749 )<sup>3)</sup>

2) 大王がフランス語を使用した事実を重んじるなら、手紙の署名にならってフレデリック (Frederic) と呼ぶべきかもしれない。

3) 手紙の引用はすべて Preuss 版により、末尾の括弧内に日付を記す。

また 1750 年の手紙では、4 つのオペラ作品の中でどの作品が姉の一番のお気に入りであるかを尋ねていて、筆頭にあげられているのはイピゲネイアである。“*Quel opéra jouera-t-on qui puisse vous plaire? Sera-ce Iphigénie, Coriolan, Armide, ou Phaéton?*” (19 avril, 1750)

イピゲネイアは、ギリシャ神話で有名なトロイ戦争の際、ギリシャ軍の総大将であったアガムムノーンの娘であり、父によって祖国の戦いを勝利に導くため生贄にさしだされるという運命を担っていた。この「アウリスのイピゲネイア」の後日談となる「タウリスのイピゲネイア」には、父を殺した母に対してその復讐を遂げ、その後狂気の状態に陥る弟オレステースも登場する。アウリスで生贄の祭壇から、女神アルテミス（ダイアナ）自身によって救い出された（*deus ex machina*）イピゲネイアはタウリスで巫女となっている。よそ者はこの地では犠牲として祭壇に捧げられるという掟があるが、狂気ゆえに放浪し、タウリスにたどり着いた弟に出会ったイピゲネイアは、弟の命を助けようとする。この作品では姉の弟に対する情愛、又姉弟の強い絆が主題となっている。弟想いのイピゲネイアの人物像に、フリードリッヒは姉ヴィルヘルミーネのイメージ、姉に対する想いを重ねていたのではないだろうか？

ヴィルヘルミーネがバイロイトへ嫁いだのは 1731 年 11 月のことであった。一時期、彼女はイギリスの皇太子のもとへ嫁ぐかもしれないと取り沙汰されたこともあった。イギリスとは比べようもないほどの小さな国、バイロイトへ嫁ぐことが決まったとき、あんなところに嫁いだら不幸になるだけだと、姉の将来を案じて弟フリードリッヒは言ったと伝えられている（MacDonogh, p.82）。父王の意のままに、<sup>4)</sup> 将来が決められる姉の姿とイピゲネイアのそれとを重ね合わせていたように思われる。アウリスでイピゲネイアが毅然として生贄の祭壇へ進んだように、姉ヴィルヘルミーネもまた自らの運命を受け入れ、バイロイトへ嫁いだのであった。

今でこそバイロイトと言えばドイツ随一のオペラのメッカ、ワーグナー（Wilhelm Richard Wagner, 1813-83）の牙城・本拠地であるが、当時はプロイセンからみてまだ辺境の地であった。ヴィルヘルミーネは弟フリードリッヒがベルリンに建設させた（1742 年完成）オペラハウスにならって、その後、自らもバイロイトに音楽の殿堂を建てさせることになる（1745 年）<sup>5)</sup> ヴィルヘルミーネ自身、またどれほどオペラを愛していたかは、弟フリードリッヒに宛てた手紙の中に読み取ることができる。

Rien ne me fait plus de plaisir qu'un bel opera; mes oreilles communiquent les doux accents de la voix jusqu'au fond de mon cœur. Un beau jardin, de magnifiques bâtiments charment

4) 弟、フリードリッヒが父王から許されるためにヴィルヘルミーネはこの結婚を承諾したが、イギリスとの縁組を望んでいた母の不興を買ったという。（Mitford, pp. 33, 35）

5) オペラ的な見世物はルイ 14 世の時代以降、権力・富の象徴と見なされていた。

mes yeux. ( 4 août, 1747 )

幼少期 ( 4 歳 ) のフリードリッヒと姉ヴィルヘルミーネを描いた肖像画 ( Antoine Pesne, 1683-1757 の作 ) が残されている。弟フリードリッヒの、太鼓の撥を持つ左手に姉が右手を添えていて、ヴィルヘルミーネが正面 ( 観る者 ) に視線を向けているのに対し、弟は姉の顔を見上げている姿が描かれている。<sup>6)</sup>一緒に音楽を楽しみ、幸せな日々を送った幼いときの思い出が、2人の心の中に終生生き続けていたと思われる。

1732年にフリードリッヒが姉に送った手紙にも “ Nous avons eu avnt-hier musique, et l'on a bien pensé à vous. ” ( 24 mars ) と書かれてある。姉弟の心を結ぶ強い絆の1つが音楽であったと言えるであろう。他の妹たちに対してもフリードリッヒは兄として、優しい想いに溢れた手紙を書き送っているが、姉ヴィルヘルミーネに対する気持ちは別格のように感じられる。姉が亡くなる前の手紙には心も魂もパイロイトにあるとフリードリッヒは気持ちを伝えている。 ( 10 septembre, 1758 )

後年、フリードリッヒが友情を深めたザクセン選定候夫人 ( l'Électrice Marie-Antonie de Sax, 1723-80 : 夫人自身もオペラを書き、出版させるほどのオペラ通であった。 ) 宛ての手紙の中に、ラシーヌ ( Jean Racine, 1639-99 ) の『イフィジェニー ( *Iphigénie*, 1674 )<sup>7)</sup> の上演に関する記述を見出すことができる。表現手段はオペラではないが、このイピゲネイアのモチーフをフリードリッヒがどれほど重要視していたかを伝えるエピソードであると考えられる。

Les seules tragédies supportables que j'aie vu executer l'ont été par des personnes de condition. Dernièrement mes neveux et mes nièces ont joué *Iphigénie* de Racine, et je puis dire avec vérité qu'il y avait des morceaux si bien rendus, qu'on ne pouvait retenir ses larmes. ( 30 janvier, 1765 )

Hier nous avons eu *Iphigénie* de Racine. L'excellence de la pièce a brillé malgré la médiocrité des acteurs qui la reprenaient; tant la génie de Racine était supérieur à celui des auteurs dramatiques modernes. ( 1 août, 1770 )

姉の死後も、オペラ、演劇のジャンルを問わず、イピゲネイアはフリードリッヒにとって大事

6 ) 2人の手前には子犬が元気に飛び跳ね、またヴィルヘルミーネの背後には黒人の召使が描かれている。 ( Stiftung Preu ische Schlösser und Gärten Berlin-Brandenburg / Bildarchiv )

7 ) 『オペラ論』の中でアルガロッチも台本製作の段階でラシーヌの言葉遣いの美しさに惚れたことを述べている。 ( Cf. Algarotti, p.111 )

なモチーフとして彼の心の中に生き続けたのであった。<sup>8)</sup>

### 3 . アルガロッチェとヴィルヘルミーネ

アルガロッチェは二度にわたるイギリス滞在（1736年と1739年）のあと、即位したフリードリッヒからの再三の要請に応じてプロイセンの宮廷に伺候することとなった。大王にとって同年齢のアルガロッチェはイギリスの話題を共有できる話し相手として大切な友人であった。アルガロッチェがプロイセンの宮廷に伺候したときには（1740年）ヴィルヘルミーネは既にパイロイトの人であったが、大王の側にいたアルガロッチェには、姉に対するフリードリッヒの想いが理解できていた筈である。ここではアルガロッチェとヴィルヘルミーネの関わりについて考察したいと思う。

アルガロッチェをイギリスから呼び寄せることができたとき、またザクセンのコレクション収集の任を終えて、アルガロッチェが再びプロイセンの宮廷に戻ってきたとき（このとき大王は伯爵の称号を授けた。）アルガロッチェを手元におけることについて、フリードリッヒはヴィルヘルミーネに次のように伝えている。

Nous raisonnons en chemin de philosophie, Algarotti et moi, et nous badinons avec Keyserlingk. (14 juillet, 1740)

Je crois, comme vous dites, que l'envie a un peu mordu sur Algarotti, et que l'on a grossi ou falsifié des choses qu'il peut avoir dites très-innocemment. Il s'est engagé ici sur le pied de chambellan, et J'en suis très-content, car, quant à l'esprit, j'aurais peine, dans toute l'Europe, de trouver mieux que lui.(7 avril, 1747)

アルガロッチェの才を愛し、自分の宮廷に招き入れ、硬軟両方の話題を共有できたフリードリッヒ大王の日常生活の一端をここには垣間見ることができる。アルガロッチェを自分の側における弟のうれしい気持ちを姉は十分察していたと思われる。1752年の弟宛ての手紙に次のように書いている。“La conversation de Voltaire, d'Argens et d'Algarotti vous en paraîtra d'autant plus agréable; . . .”(11 novembre)

次の3通の手紙は、ヴィルヘルミーネが1755年にイタリアを訪れたときの（既にヴェネツィア

8)「タウリスのイピゲネイア」のオペラ上演についてもフリードリッヒは夫人宛ての手紙で触れている。(24 décembre, 1771)

にアルガロッチィは戻っていたが、) 様子を伝えるものである。

(アルガロッチィからフリードリッヒへ)

Dans le séjour extrêmement court qu'elle a fait à Venise, le gouvernement s'est extrêmement empressé de lui rendre toute sorte d'honneurs. . . ( 27 juillet )

(フリードリッヒからヴィルヘルミーネへ)

Je crois que, après avoir vu Rome, le reste de l'Italie, quoique beau, ne lui est point comparable. Je suis charmé que, dans le pays des *Pantaroni*, Algarotti se soit conduit de façon à vous contenter. ( 13 août )

(フリードリッヒからアルガロッチィへ)

Je vous remercie des nouvelles que vous me donnez à l'occasion du passage de ma sœur, madame la margrave de Baireuth, par Venise. La politesse de vos compatriots m'était connue, et vous seul auriez bien suffi pour m'en donner l'idée que je dois en avoir. ( 19 août )

バイロイト辺境伯夫人として、ヴィルヘルミーネはヴェネツィアで歓迎された。弟のお気に入りであったアルガロッチィと、またフリードリッヒが大切にした姉という2人の実際の出会いの様子はどのようなものであったのだろうか？

『オペラ論』の出版年には初版の1755年を採るもの、またなぜかフリードリッヒではなく、イギリスの大ピット ( William Pitt, the elder, 1708-78 ) 宛ての献辞が載せられている1762年を採る説がある。完成版ができたあと、この本は次々に各国語に訳され、( 英語：1767年、ドイツ語：1769年、フランス語：1773年 ) 影響を及ぼした。ヴェネツィアでヴィルヘルミーネ本人を前にして、アルガロッチィがフリードリッヒの大切なイピゲネイアのモチーフを再確認したであろうことは想像に難くない。

『オペラ論』の原注によると、ベルリンの劇場でアルガロッチィのイピゲネイアの台本は好評のうちに上演されている ( Algarotti, p. 109 )。また1748年から49年のシーズンにかけては、グラウンのオペラが上演されている。イピゲネイア像にこめられたフリードリッヒの想いを十二分に理解できたアルガロッチィにとって、「アウリスのイピゲネイア」はプロイセンで上演されたオペラ作品の中でも特に重要な位置を占めていたと思われるのである。

#### 4. おわりに

プロイセンをヨーロッパの強国の1つに発展させたフリードリッヒ大王。ポーランド継承戦争(1733-35)、オーストリア継承戦争(1740-48)、七年戦争(1756-63)と立て続けに起こる戦争の時代に、政治でもまた軍隊の指揮においても辣腕を振った大王の、一方で姉に対する優しい想いをイピゲネイア像の中に読み取るとき、一人の人間としてのフリードリッヒが目の前に現れるように思われる。

アルガロッチェは、“an exotic and irrational entertainment”<sup>9)</sup>と言われ、ヴェネツィアのカーニバルの雰囲気にも通じる、当時のオペラに総合芸術としての枠組みを与えるために『オペラ論』を書いた。この『オペラ論』の付録の台本として、イピゲネイアの作品を選んだ理由には、フリードリッヒの姉に対する想い、そして何よりそれを、アルガロッチェが理解していたことが挙げられる。理論と実践という図式で考えるならば、オペラの理論を担当したのはアルガロッチェであり、プロデューサーとして又パトロンとして大王は実践面、実現を可能にする役目を担当したと言えるであろう。しかし『オペラ論』の完成は、アルガロッチェがプロイセンの宮廷を離れ、祖国イタリアに戻った後のことであった。この理論と実践の構図を作りだした触媒こそイピゲネイアのモチーフであり、またヴィルヘルミーネであったと推察されるのである。

\*この論考はサウンディングズ英語英米文学会(第49回研究発表会、2004年5月8日、於 昭和女子大学)における口頭発表(「アルガロッチェとイピゲネイアのモチーフ」)をもとにまとめたものである。また平成16～18年度の科学研究費補助金による研究の一環をなしている。

#### [参考文献(含CD)]

エウリピデス、「タウリスのイーピゲネイア」(久保田忠利 訳 [1991])、『ギリシャ悲劇全集7』、岩波書店。

エウリピデス、「アウリスのイーピゲネイア」(高橋道男 訳 [1992])、『ギリシャ悲劇全集9』、岩波書店。

グラウト、D. J.、『オペラ史 上』(服部幸三 訳 [1957])、音楽之友社。

近藤裕子 [2004]、「十八世紀の国際人・アルガロッチェ」、『日伊文化研究』、第42号、pp. 59-65。

近藤裕子 [2004]、「アルガロッチェのイピゲネイアをめぐる一考察」、『東洋大学経済論集』、第29巻2号、pp. 33-39。

9) Dr. Samuel Johnson (1709-84) の言葉。Cf. Cobban, p. 27.

福田晴虔 [ 1991 ] 『建築と劇場 十八世紀イタリアの劇場論』、中央公論美術出版。  
プラントムラ、C. 『ヨーロッパ オペラの旅』(近藤茉莎 訳 [ 2003 ])、音楽之友社。  
水谷彰良 [ 2003 ] 『消えたオペラ譜 楽譜出版にみるオペラ 400 年史』、音楽之友社。  
ラシュトン、J. 『古典派音楽小史 グルックからベートーヴェンまで』(前田直哉訳 [ 1995 ])、音楽之友社。

Algarotti, F. *An Essay on the Opera written in Italian by Count Algarotti*, [ 1767 ] London: L. Davis and C. Reymers.

Applegate, C. & Potter, P. ( ed. ) [ 2002 ] *Music and German National Identity*, Chicago and London: The University of Chicago Press.

Cobban, Alfred ( ed. ) [ 1969 ] *The Eighteenth Century Europe in the Age of Enlightenment*, London: Thames and Hudson.

MacDonogh, G. [ 1999 ] *Frederick the Great A Life in Deed and Letters*, London: Weidenfeld & Nicolson.

Mitford, N. [ 1970 ] *Frederick the Great*, London: Penguin Books.

Preuss, J.D.E. ( ed. ) [ 1846-57 ] *Œuvres de Frédéric le Grand*, 32vols. Berlin: imprimerie royale.

Sadie, Stanley ( ed. ) [ 1992 ] *The New Grove Dictionary of Opera*, 4vols. London: Macmillan.

Stieger, Franz [ 1975-83 ] *Opernlexikon*, 11vols. Tutzing: Hans Schneider.

( CD ) Von Gluck, Christoph Willibald, *Iphigenie in Aulis* [ 1996 ] ( 1962 のライブ録音 ) Wiener Philharmoniker ( Karl Böhm 指揮 ) München: ORFEO. ( Gluck のオペラ作品は 1774 年の発表当時、大成功を収めたといわれている。ラストシーンをアルガロッチの台本にならって変更したといわれ、現在この CD でその *deus ex machina* の手法によるラストとともに全幕聞くことができる。 )